

平成 27 年度活動報告書 (1/1)

学部・委員会名	地域環境科学部
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	地域環境科学部
テーマ	

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

地域環境科学部に対する社会ニーズの変化（建設からマネジメントへ、地域の担い手養成、グローバル化の進展など）に対応できるよう組織改革を進めるとともに、ディプロマポリシーやカリキュラムポリシーに示した学生にとって魅力ある教育の推進、国際化の進展、J A B E E 教育プログラムの継続改正による技術教育の質の向上を目指す。具体の目標は以下のとおり。

- ① 学部改革の議論をさらに進め、新設学科の具体化に加えて、既存学科を含めた学部全体の魅力を高めるための活動を行う。
- ② 実学教育の推進、特に学部共通の実学強化週間を設けてまとまった時間を確保すると共に、地域連携やフィールド学習による実践的な教育を推進する。

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

- ① 新設学科のカリキュラム作成や担当者の検討など、より具体的な内容を充実させ、設置申請の準備を進める。
- ② 「学部改革実行委員会」を中心に、実学強化週間の実施に向けて各部署との調整を行うとともに、学科横断型の「エキスパート・プログラム」設置に向けた準備を行う。
- ③ 学部の魅力を内外に発信するための「学部の出版物」の編集・刊行を行う。
- ④ J A B E E 継続審査のための準備を進める。（造園科学科）
- ⑤ 台湾東海大学との学術連携協定を締結する。

3. 達成度を判断するための指標

- ① 新設学科（地域創成科学科）の設置申請（事前相談）
- ② 実学強化週間の実施計画の作成・決定。
- ③ 「学部の出版物」の編集・刊行
- ④ J A B E E 継続審査の実施（造園科学科）

4. 成果・評価

■成果

- ① 新学科設置については、カリキュラム作成や担当者を揃えて申請を行った。事前相談の結果、12月17日に文部科学省から「地域創成科学科」の「届け出による設置可」の連絡をいただき、付帯意見は無く、当初の目標以上の成果を達成できた。
- ② 実学強化週間の実施については、新学科創設を含めた学部改組の準備を優先させたため、議論は進めているものの、大学側との調整が整わず、達成できていない。
- ③ 学部紹介の出版物については、学部所属教員全員が執筆した『「はかる・つくる・えがく・そだてる」みどりの地域を育む～地域環境科学がわかる本』（農大出版会）を7月に刊行した。
- ④ J A B E E 継続審査については、造園科学科の継続審査が11月に実施され、審査に合格した。
- ⑤ 1月22日に台湾東海大学との連携協定に調印した。

■評価（5～1で記載してください）

- 4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。

5. 課題及び改善事項
6. 平成 28 年度への継続の有無

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書(1/3)

学部・委員会名	地域環境科学部(森林総合科学科)
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	森林総合科学科
テーマ	広報活動の充実

1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)
森林の利用を人と自然の共生系として捉え、これまでの森林・林業・林産業のあり方に加えて、森林の生物多様性の保全と持続的利用のバランスを考えた地域づくりに対応できる専門家教育の充実を図る。すなわち、森林資源の持続的な生産や資源利用としての木材生産と加工・流通を中心に教育・研究の目的としてきたが、人々の暮らしの活性化とそれに伴う森林文化の醸成が循環型社会を構築し、持続的な地域づくり、特に、持続的な森林管理や林業経営を可能にするという視点を充実させる。学生には自らの価値観と総合的思考方法を”森林”から学び取らせるために、実学主義に対応した教育研究環境を提供し、さらに演習林実習も充実させる。
2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)
受験生の増加に向けた学科広報のあり方を検討し、パンフレットの見直しや学科ガイダンスブックの刊行などPR活動の充実を図る。
3. 達成度を判断するための指標
① 指定校制度を充実させ、森林系の指定校を増やす。 ② 高校への出前講義を増やし、学科のPRを行う。 ③ 全国高等学校森林・林業教育研究協議会に参加し、大学・学部・学科のPRを行う。 ④ パンフレットの見直しを行う。
4. 成果・評価
■成果 ・森林系の指定校は以下の通りで、◎では出前講義を行った。 ◎八重山農林(沖縄県) ラ・サール(鹿児島県) 北桑田(京都府) ◎天竜(静岡県) ◎木曽青峰(長野県) ◎多摩大学附属聖ヶ丘(東京都) ◎香蘭女学校高等科(東京都) ◎安田学園(東京都) 獨協(東京都) 三鷹(東京都) ◎八丈(東京都) 国分寺(東京都) 中央学院(千葉県) 日出学園(千葉県) ◎高崎健康福祉大学高崎(群馬県) 尾瀬(群馬県) ◎勢多農林(群馬県) 大子清流(茨城県) ・受験生用にみどりの地域を育む地域環境科学がわかる本「はかる・つくる・えがく・そだてる」を学部から刊行した。学科紹介の文章表現を判り易く変えている。また、オープンキャンパスでは野外の調査等を体験できるブースを多くし、高校生から高い評価を受けた。 ■評価(5～1で記載してください) 4
5. 課題及び改善事項
とくになし。課題及び改善点は今後に取り組んでいく。
6. 平成28年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成 27 年度活動報告書 (2/3)

学部・委員会名	地域環境科学部（森林総合科学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	森林総合科学科
テーマ	同窓会との連携の充実

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
森林の利用を人と自然の共生系として捉え、これまでの森林・林業・林産業のあり方に加えて、森林の生物多様性の保全と持続的利用のバランスを考えた地域づくりに対応できる専門家教育の充実を図る。すなわち、森林資源の持続的な生産や資源利用としての木材生産と加工・流通を中心に教育・研究の目的としてきたが、人々の暮らしの活性化とそれに伴う森林文化の醸成が循環型社会を構築し、持続的な地域づくり、特に、持続的な森林管理や林業経営を可能にするという視点を充実させる。学生には自らの価値観と総合的思考方法を”森林”から学び取らせるために、実学主義に対応した教育研究環境を提供し、さらに演習林実習も充実させる。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
同窓会との交流・連携をふまえ、日本の森林・林業を推進するための組織を検討したい。
3. 達成度を判断するための指標
① 学科の 70 周年記念事業を立ち上げる。 ② 学科 70 周年の軌跡を DVD に収録する。 ③ 学科 70 周年の記念誌を発行する。
4. 成果・評価
■成果 森林総合科学科の創設 70 周年に向けて同窓会と連携した祈念式典を計画し、また、学科紹介の DVD 制作や記念誌の編集を行っている。民有林経営のためにシンポジウムを開催し、産学で共通した視点で課題に取り組む場を設けた。
■評価（5～1 で記載してください） 4
5. 課題及び改善事項
平成 28 年 5 月 22 日に記念式典を予定しており、その日を目途に成果・評価を目に見える形にしていく。
6. 平成 28 年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書 (3/3)

学部・委員会名 地域環境科学部（森林総合科学科）

学部長・委員長等氏名 学部長 麻生 恵

担当所管 森林総合科学科

テーマ ディプロマポリシーを実現するための取り組み

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
森林の利用を人と自然の共生系として捉え、これまでの森林・林業・林産業のあり方に加えて、森林の生物多様性の保全と持続的利用のバランスを考えた地域づくりに対応できる専門家教育の充実を図る。すなわち、森林資源の持続的な生産や資源利用としての木材生産と加工・流通を中心に教育・研究の目的としてきたが、人々の暮らしの活性化とそれに伴う森林文化の醸成が循環型社会を構築し、持続的な地域づくり、特に、持続的な森林管理や林業経営を可能にするという視点を充実させる。学生には自らの価値観と総合的思考方法を”森林”から学び取らせるために、実学主義に対応した教育研究環境を提供し、さらに演習林実習も充実させる。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
分かりやすく表現できる記述力、プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力のスキルアップを行う。
3. 達成度を判断するための指標
① 各研究室で英論文を含む論文紹介を行う。 ② 卒業論文に取り組むための所信表明や中間発表を各研究室で行う。
4. 成果・評価
■成果 ・実験・実習に力を入れた実学教育を行い、卒業論文等の作成を通して、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力などを身につけさせている。 ・3年生を中心に専攻実験実習で英論紹介をする研究室があった(例 森林生態学研究室) ・ほとんどの研究室が前学期の専攻実験実習に3年生の卒論に向けた所信表明、後学期の専攻実験実習で、4年生の卒業論文の中間発表を3年生に聞かせるようにした。 ■評価（5～1で記載してください） 4
5. 課題及び改善事項
英論文紹介はすべての研究室で行われたのではないので、周知し、浸透させていく必要がある。
6. 平成28年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書 (1/2)

学部・委員会名	地域環境科学部
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	生産環境工学科
テーマ	JABEE コース履修生の増加

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
学科の目的を達成するために、ディプロマポリシーがある。そのポリシーを学生に周知させ、それに基づく教育を実践する。本学科の教育システムは「生産環境コース」と「技術者養成コース」があり、後者が JABEE コースである。2 つとも本学科のディプロマポリシーを実現する内容で運用されているが、平成 27 年度はディプロマポリシーの実現のため、JABEE コース履修生を増加させることを目標とする。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
4 月、 学生に対するディプロマポリシーの周知， 3 年生に対する JABEE コースの説明と登録 10 月、 JABEE コース履修生の達成度確認 2 月、 JABEE コース修了者確認
3. 達成度を判断するための指標
年度終了時における JABEE コース登録学生数
4. 成果・評価
■成果 平成 26 年度 3 年生の JABEE コース登録者数は 34 名であった。平成 27 年度 3 年生の登録者数は 40 名に増加した。 ■評価（5～1 で記載してください） 4 方針に基づいた活動を行い、一定の成果を得た。
5. 課題及び改善事項
3 年次学生数に対する JABEE コース登録者の割合の改善。
6. 平成 28 年度への継続の有無
平成 28 年度においては活動計画としてあげないが、改善を継続していく。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成27年度活動報告書 (2/2)

学部・委員会名	地域環境科学部
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	生産環境工学科
テーマ	教育改善のための外部評価の実施

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
学科の目的を達成するために、ディプロマポリシーがある。そのポリシーを学生に周知させ、それに基づく教育を実践する。ディプロマポリシーに沿った教育をより確実に実施するためには、PDCA サイクルによる教育システムの改善を行う必要がある。本学科では学科の教育システムを評価するために、非常勤講師懇談会および、教育システム評価委員会を設けているが、本年度はこれらの活動を確実に実施し、次の教育システム改善に資する意見聴取を行う。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
6月、非常勤講師懇談会を開催し、地域環境科学部の関連科目および生産環境工学科開講科目担当の非常勤講師および学内兼任教員より、学科の教育システムについて意見聴取を行う。
11月、収穫祭にて、卒業生および技術士を委員とする教育システム評価委員会を開催し、社会における生産環境工学科の教育プログラムについて意見聴取を行う。
3. 達成度を判断するための指標
目標達成の指標は、非常勤講師懇談会および教育システム評価委員会の実施である。
4. 成果・評価
■成果 平成27年6月15日に非常勤講師懇談会を実施した。 平成27年10月31日に教育システム評価委員会を実施した。 ■評価（5～1で記載してください） 5 方針に基づいた活動を行い、非常勤講師および卒業生等から学科の教育について意見聴取と議論を行った。
5. 課題及び改善事項
大学教育に対する社会の要望は変化していくので、今後も継続して実施する必要がある。
6. 平成28年度への継続の有無
平成28年度の活動計画としては上げないが、今後も継続して実施していく。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成 2 7 年度活動報告書（詳細）（1/5）

学部・委員会名 地域環境科学部（造園科学科）

学部長・委員長等氏名 学部長 麻生 恵

担当所管 造園科学科

100 周年に向けた 10 年間の第一歩

テーマ (1)ディプロマポリシーにもとづくカリキュラムプログラムの実施と改善

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる実践力を養う教育研究の場とすることを大きな目標として、本テーマでは以下のような目標を掲げ、計画と達成度について検討している。

目標

(1)ディプロマポリシーにもとづくカリキュラムプログラムの実施と改善

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

(1)カリキュラムポリシーに基づき、学習目標を学生に周知して授業を実施するとともに、レポート・試験を通して達成度の評価を行う。また、このような一連の考え方と実践は、既に JABEE 認定審査によって絶えず教育体制の自己点検を実施しているので、継続的な取り組みと実施計画を計画し既に実践している。

学科内にカリキュラム検討委員会を設置して定期的に、①実習・演習の個々のカリキュラム間の連動性、②各実習・演習科目の 15 回シラバスの点検、③委員会検討事項の学科内への報告と改善など提案、等を実施している。

3. 達成度を判断するための指標

・授業における学生自己評価と満足度評価

各カリキュラムごとに授業ファイルを作成し、①授業シラバス、②授業資料、③試験やレポート課題、④③の結果と評価、⑤学生による授業アンケート添付、等の授業ファイルを各担当教員が作成し保管し、JABEE の第三者審査機関の要求に応じて提出できるように準備している。

・JABEE 認定審査による教育点検評価

上記に学科システムや大学のシステムを明記し相互の支援関連性や評価方法の点検を実施し判断の妥当性を確認している。

4. 成果・評価

述した目標と実施計画に対する成果と評価を以下に記した。

(1) ディプロマポリシーにもとづくカリキュラムプログラムの実施と改善・・・(評価 4)

ディプロマポリシーにもとづくカリキュラムプログラムの実施と改善という目標に対しては当初からのカリキュラムポリシーに基づき、授業初回に各科目（卒業論文を含む）の学習目標を周知した授業実施と、レポートや試験を通して達成度の評価を行うことを実施段階の計画としている。造園科学科は JABEE による第 3 者評価を受けてカリキュラムや実習演習を計画・実施・点検・評価を繰り返して継続している。本年度もこの手順に基づき大学からの活動計画と報告の意図に基づき、また、JABEE が要求する項目や視点に基づき、実施した。各授業には担当者が作成する授業ファイル(すべての科目)が存在し、第 3 者に閲覧できる状態となるよう本年度も作成中である。以前より学科内にカリキュラム検討委員会を設置し、また JABEE 検討委員会も設置して、授業シラバス記載確認、シラバス記載事項の不足確認、授業担当者への確認、などの作業を通じて実施してきた。

<添付資料>

なし

平成27年度活動報告書（詳細）（2/5）

学部・委員会名 地域環境科学部（造園科学科）

学部長・委員長等氏名 学部長 麻生 恵

担当所管 造園科学科

100周年に向けた10年間の第一歩

テーマ (2)海外大学等との学術交流によるグローバル教育の推進

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる実践力を養う教育研究の場とすることを大きな目標として、本テーマでは以下のような目標を掲げ、計画と達成度について検討している。

目標

(2)海外大学等との学術交流によるグローバル教育の推進

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

(2)海外の研究者、技術者による特別講義開催、学術交流校等との共同プロジェクト研究等の実施によりグローバル社会への適応能力向上を図る。

造園科学科では既に、東海大学(台湾(本年度で2年継続))、上海交通大学(中国(本年度で5年継続))、北京農業大学(中国(本年度で2年継続))などとの交流を実施し、造園科学科の教員並びに大学院生を派遣して学術交流を実施してきた。また、国際協力センターの支援によりさらに学術交流を図る計画について検討を実施している。

本年度中に予定している学術交流は東海大学との学生教員間の交流、また、研究者レベルでの学術交流では中国・精華大学の李教授との交流が6月に予定されている。

3. 達成度を判断するための指標

・造園科学科における海外学術交流に関わる特別講義、共同プロジェクト等を予定し、その実施と継続が重要となる。

講義やプロジェクトを通して、相互に達成度を確認しあい、次回につなげる内容を確認することとしている。

4. 成果・評価

(2)海外大学等との学術交流によるグローバル教育の推進・・・(評価4)

海外大学等との学術交流によるグローバル教育の推進という目標を掲げて、本年度も実施してきた。海外の研究者や造園・緑化など緑の仕事にかかわる専門技術者との特別講義、学術交流、共同研究プロジェクト等を実施し、グローバルな観点での能力向上を図ることを意図してきた。昨年度は、東海大学(台湾(本年度で3年継続))、上海交通大学(中国(本年度で6年継続))、北京農業大学(中国(本年度で3年継続))との交流会を実施してきた。

地域環境科学部あるいは造園科学科としての学術研究交流では、学内の国際協力センター

の組織から様々な支援を頂き、特に教員での交流を図る継続ができた。また、東海大学(台湾)、上海交通大学では日本造園学会会員の方々と学生グループの交流が達成できた。また、教員の共同研究打ち合わせでは、ミシガン州立大学のランドスケープ分野に所属する教授との交流が可能となった。目標に対する達成や成果を4として評価した。

<添付資料>

なし

平成27年度活動報告書（詳細）（3/5）

学部・委員会名	地域環境科学部（造園科学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	造園科学科
	100周年に向けた10年間の第一歩
テーマ	(3)産・官・学の連携による実学教育の推進

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる実践力を養う教育研究の場とすることを大きな目標として、本テーマでは以下のような目標を掲げ、計画と達成度について検討している。 目標 (3)産・官・学の連携による実学教育の推進
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
(3)産・官・学との連携により、実践的な演習・実習授業およびフィールドワークを通しての実務能力の向上を図る。 造園科学科の授業担当者には非常勤講師として、①環境調査・計画系コンサルタント業務に係るスタッフ、②緑地環境計画・設計・管理・運営業務に携わるスタッフ、③緑化・植栽・施工・監督等の業務関わるスタッフなど多くのプロフェッショナルの方々に担当頂いているため、社会が要求する職能、スキル、技術について授業を通してすでに実践している。演習室内での授業、屋外での授業でも専門分野のバランス均衡を点検して、内容をシラバスに反映し実施している。
3. 達成度を判断するための指標
・演習等における設定課題テーマの内容、課題成果の発表・講評、ならびに評価 授業での成果は基本的に授業担当者以外でも学科教員全員が公表・評価できる参画型の成果発表会を実施しており、担当教員以外でも講評や確認や点検が可能である。また、業務に携わるプロの非常勤教員が直接達成度に関わる評価を学生や教員に伝え、授業内容の確認が可能となっている。このような形式は今後も継続しながら検討してゆくことが重要である。
4. 成果・評価
上述した目標と実施計画に対する成果と評価を以下に記した。 (3)産・官・学の連携による実学教育の推進・・・(評価4) 産・官・学の連携による実学教育の推進を目標として、産・官・学の連携による実践的な演習や実習およびフィールドでの実習を通して、目標達成の意図を図った。 カリキュラムでは造園計画、造園設計、造園デザイン、造園管理施工、管理運営など一連の内容を演習や実習を通して可能にすることを意図した。造園科学科では非常勤講師の先生方による

授業、演習、実習を実施していること、また客員教授による授業も含めて、実学教育を目指してきた。

また、日本技術者教育認定機構(通称:JABEE)が要求する連携教育や社会との接点を重要視した技術者教育も実践してきた。

川崎市早野地区(早野聖地公園)において造園科学科 1 年生の演習である造園体験演習を継続実施してきた。これは、川崎市(公園緑地)と地域環境科学部の学術連携協定によるもので、地域連携と実学と官民学一体の活動としても位置づけができる。また学内で実施する造園体験演習では造園科学科の非常勤講師、卒業生有志、造園科学科教員、ボランティア等の多くの協力者や連携者による旧 1 号館芝生地整備も実践的演習実習の大きな成果である。

<添付資料>

なし

平成27年度活動報告書（詳細）（4/5）

学部・委員会名	地域環境科学部（造園科学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	造園科学科
	100周年に向けた10年間の第一歩
テーマ	(4) 地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる実践力を養う教育研究の場とすることを大きな目標として、本テーマでは以下のような目標を掲げ、計画と達成度について検討している。

目標

(4) 地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

(4) 地域との連携により、実践的な研究プロジェクト等の実施による実務能力およびコミュニケーション能力の向上とともに、社会的意義の高揚を図る。

近年における全学審議会が推進する①アクティブラーニングの考え方と実施を尊重して、また、②学科独自が数十年前から実施してきた内容との両立を考え、実施計画を検討している。①における具体実施計画では、川崎市と地域環境科学部間における協定、我孫子市と造園科学科における協定などに基つき、地域計画・設計や管理運営に関する演習を学部と大学院の授業で実施している。学部の造園体験演習(造1)や卒業論文(造4)など、大学院では自然再生や地域づくり、里山再生や管理運営に関わる授業において実施している。またカリキュラム以外の学科プログラムとして「京都庭園実習」など実務的な特別プログラムを毎年実施している。

3. 達成度を判断するための指標

・地域連携による研究プロジェクト等の実施数、評価

授業での成果は基本的に授業担当者以外でも学科教員全員が公表・評価できる参画型の成果発表会を実施しており、担当教員以外でも講評や確認や点検が可能である。また、業務に携わるプロの非常勤教員が直接達成度に関わる評価を学生や教員に伝え、授業内容の確認が可能となっている。このような形式は今後も継続しながら検討してゆくことが重要である。

4. 成果・評価

(4) 地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進・・・(評価4)

地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進を目標として、実践的な研究プロジェクトや授業によって実践的継続を図ってきた。前述した産・官・学の連携による実学教育との重複もあるが、1年生のカリキュラム(造園体験演習など)での継続実施、ならびに主としてランドスケープ資源植物分野の教員の研究フィールドとしての調査研究利用が可能になっている「川崎市早野聖地公園」における教育と研究が大きな成果を挙げている。

また、早野地域の小学校との連携による２次林を活用した自然教育にも造園科学科の学生と教員が大きくかかわり成果を得ている重要な意味を持つ。

10 数年も経過する京都御所でのボランティア活動も大きな成果といえる。宮内庁が管理する御所や御所の庭園を対象とした学科プログラムを継続的に実施している。毎年の研修先や内容に若干の相違はあるが日本を代表する歴史遺産、文化財などを研修先とするこのプログラムは今後も継続して実施する予定である。このプログラムには卒業生や地域で活躍する方々、特に京都の庭園文化を世界に発信する地域在住の方々の協力を得ることができ、継続し大きな成果を挙げている。

<添付資料>

なし

平成27年度活動計報告書（詳細）（5/5）

学部・委員会名	地域環境科学部（造園科学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 麻生 恵
担当所管	造園科学科
	100周年に向けた10年間の第一歩
テーマ	(5) 学科創立100周年に向けた教育研究の再構築

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる実践力を養う教育研究の場とすることを大きな目標として、本テーマでは以下のような目標を掲げ、計画と達成度について検討している。

目標

(5) 学科創立100周年に向けた教育研究の再構築

2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

(5) 10年後の創立100周年に向けた造園学教育の再構築に関する実施計画

昨年90周年を迎え、造園学の研究・教育には国際化、グローバル化、社会が要求する職能等をキーワードとした自己点検と将来展望の必要性が再確認された。実施計画には各地域に在住する卒業生との交流、100年に向けた造園学の研究と教育のあり方について議論できる機会を設け、卒業生との意見交換や造園科学科の将来展望に関わる示唆を頂く会を計画することとした。具体的には、新潟県、長野県、福井県、富山県、石川県に在住する卒業生との会を8月に企画している。また、造園科学科卒業生で構成する全国緑友会や東京緑友会等の組織との連携を通じた講演会やカレッジ講座(9～1月(計5回シリーズ))を企画している。

3. 達成度を判断するための指標

・達成評価や評価指標が極めて難しい目標であるが、卒業生との交流会の成果、カレッジ講座や講演会内容の評価に対する学生や社会人、専門分野における業界の方々の評価を重要として、自己点検と再確認を踏まえアクションプログラムを立案しながら継続することが重要と言える。

4. 成果・評価

(5) 10年後の創立100周年に向けた造園学教育の再構築に関する実施・・・(評価5)

造園学教育の100年目を目標としたスタートプログラムを構築し運営する目標を掲げて、具体的な活動を進めた。本年は造園科学の前身である東京高等造園学校設立から数え創立92年目になり、記念事業企画とその運営を通して、造園学教育の再検討・構築にむけた課題と方向性を明確にして来た。

本年度は造園科学科創立100周年に向けた催事を福井県で実施した。信越地域に在住する卒業生との情報交換を兼ねた、100周年に向けてのスタートプログラムを福井県で開催することができ、

長野、富山、金沢、新潟などの地域から参加いただき、今後の造園教育と関連学協会のかかわりや造園科学科への要望や期待について交流できる会を開催した。特に、卒業生の方々と100年
今後の継続的目標として位置づけている。

<添付資料>

なし